

謝罪場面での「事情説明」における自動詞・他動詞の使用状況 —スリランカの日本語学習者を対象に—

¹D.P.O.Dassanayaka

¹Division of Japanese Language and Culture, Graduate School of Language and Culture, Osaka University of Japan
oshadidass@gmail.com

Article Info

Article history:

Received: 31.08.2022

Accepted: 15.12.2022

Available Online

Keywords:

スリランカ人日本語
学習者

自動詞と他動詞の使
用

状況説明

誤用分析

謝罪場面

Keywords

*Japanese learners of
Sri Lanka
Usage of Japanese
transitive and
intransitive verbs
Apologetic situations*

ABSTRACT

本稿では謝罪の場面を用い、スリランカ人日本語学習者(以下、SLJL)による事情説明部分における自他動詞の使用状況を調査した。調査では先生に借りた本の上にコーヒーをこぼしたことを謝罪する課題における SLJL の回答を日本語母語話者(以下、JNS)と比較した。その結果、JNS は「状況説明」において他動詞文を用いる傾向がある一方、SLJL の場合は JNS の結果と異なる傾向が見られた。SLJL が謝罪の場面において日本語を使用する際に助詞「を」と他動詞の使用について十分理解が進んでいないことがうかがえた。

In this study, a writing task was used to examine the characteristics of the usage of transitive and intransitive verbs by Japanese learners of Sri Lanka (SLJL). Twenty-two answers were selected for the study and compared with native Japanese speakers to identify the difference in the learners' usage of transitive and intransitive verbs. The results of the writing task were analyzed prioritizing the "explanation" part where the use of transitive verbs and intransitive verbs, are most likely to appear. The results of this study reveal that SLJL were more likely to use intransitive verbs rather than transitive verbs, even when they were apologizing for something they had been responsible for. Based on the results, it is possible to observe that the misuse of the transitive and intransitive verbs of SLJL is frequent due to "confusion about the formation of Japanese transitive and intransitive verbs", "confusion on the use of transitive and intransitive verbs according to different situations", "confusion due to the influence of their mother tongue, Sinhala" and "confusion about the correct use of verbs to fit the context in different actions". Therefore, when teaching transitive and intransitive verbs in SLJL need closer attention and better supervision



1. はじめに

相手に対して好ましくない事象が生じた場合は、不満を軽減させるため言語使用に十分注意を払って謝罪を行う必要がある。特になぜ好ましくない事象が生じたかという「事情説明」を相手に伝えるのが謝罪を行う際には重要であろう。なぜ好ましくない事象が生じたかという「事情説明」は、謝罪の一つのストラテジー(ボイクマン 2013)であり、動詞の他動詞を使用すると誠意が伝わりやすい(牧原 2016)とされる。つまり、「本が汚れた」よりも「本を汚した」と言う方が自分の誠意が伝わりやすいということである。一方日本語学習者にとって、謝罪の場面における自動詞・他動詞(以下は自他動詞とする)の使用は、混乱を招きやすい(牧原 2014)ところである。ダサナーヤカ(2020)も述べた通り、同様の傾向はシンハラ語を母語とするスリランカ人日本語学習者ⁱ(以下、SLJL)にも見られる。さらに、SLJL による謝罪場面の自他選択には、それ以外の場面よりも誤用が多いことも明らかになった。しかし、学習者における謝罪の場面での自他選択の混同は何に起因するものなのかは、明らかになっていない。そこで、本研究で謝罪の場面を用い、事情説明部分における自他動詞の使用状況を調査し、SLJL を対象に自他動詞の使用に混乱を招く具体的な様相やその要因について分析を行った。

2. 先行研究

田中(2006)は、日本語で謝罪をおこなう際には状況説明を具体的にすることで、謝罪の意が日本語母語話者(以下 JNS とする)に伝わりやすいと述べている。それを受け田中(2006)は、日本語教育においても、謝罪文における状況説明の方法について、日本語学習者に対して注意して指導にあたる必要があると主張した。

牧原(2016)は謝罪を述べる際の状況説明における動詞の選択について論じているが、牧原(2016)は、ポライトネスという観点から動詞の自他選択をどのように扱うべきかという今までの視点に加えて、謝罪場面で日本語の自他動詞選択の独自性について考察している。この調査は、JNS35 名と日本語学習者(上級、中上級、中級レベル)16 名を対象に行われた。対のある自他動詞を用いたいくつかの発話例を用意し、それを JNS と学習者に提示し、どちらがより自然な表現と感じられるかを調べるため、「非常に良い発話例である」「問題なく使用できる発話例である」「やや問題のある発話例である」「非常に問題のある発話例である」の四段階で評価してもらう方法で行われた。その結果、JNS は自己責任のある可能性がある場合、他動詞文を用いるのが好ましいと考えられていることを確認した。それを踏まえ、日本語学習者の場合は上級学習者とそれ以外とで比較すると、上級学習者は他動詞をよりの確な文であると判断する傾向が強いのにに対して、中級～中上級学習者は自動詞文をよりの確であると判断する場合が多くなっているという。このことから、牧原(2016)では、上級に進むに従い他動詞文

を用いた方が好ましいと認識されていくが、十分な確信は持てていない可能性がある」と述べている。さらに日本語学習者には、母語話者と異なる自他使用傾向がある結果を受け、学習者の母語の干渉が見られる可能性がある」と指摘されている。

ただし、以上の研究では本研究の調査対象者である SLJL を対象にしておらず、SLJL を対象に行われた日本語の自他動詞の習得を調べた研究は、管見の限り、ダサナーヤカ(2020)のみである。ダサナーヤカ(2020)は、学習者が日本語の自他動詞を謝罪の場面とそれ以外の場面でどの程度理解できているかについて多肢選択テストを使用し検討した。調査結果では、SLJL にとって、謝罪場面における自他選択はそれ以外の場面よりも困難であることがわかった。しかしながら、牧原(2016)の結果から考えると、学習者の母語や学習環境によって、それぞれの学習者による誤用も異なると考えられるが、その要因をはじめ詳細は不明である。そこで、本稿では SLJL を対象とした謝罪メールにおける自他動詞の選択を扱う。

3. 研究目的

本研究では、SLJL によって書かれた謝罪メールで見られる自他動詞の使用から、実際に謝罪をする場面で自他選択の混同はどのように起こり、何に起因すると考えられるのか、また自他選択の混同を避けるために SLJL がどのような工夫をしているかについて明らかにすることを目的とする。

4. 研究課題

- 1) 謝罪を表す場面を例に、SLJL による事情説明部分で自他使用は JNS と比較しどのような相違点があるか。
- 2) SLJL が謝罪における事情説明をする際、自他動詞の使用にどのような問題点があるか。

5. 調査方法



本調査では、実際に直面しやすい謝罪を表さなければならぬ場面を課題として設定した。その際、事情説明における自他動詞の使用が調査対象であることを意識させないよう、写真で状況を示した。課題をペーパー形式で SLJL に出題し、回答をペーパーへの記入、またはメールで提出させた。回答する際には辞書やインターネットの使用は認めなかつ

た。調査は2019年9月から2020年5月の間で実施した。課題は以下の通り、日本語で出題した。

問題文：「あなたは先生に本を借りました。明後日までに返さないといけません。本を読みながらコーヒーを飲んでいたら、以上の写真のようなことが起き、本を返すことができない状況です。このトラブルを解決するため、先生にメールで連絡することになったら、あなたなら、この状況をどのように説明しますか。」

6. 調査対象者

スリランカの大学において日本語学を専攻とする SLJL 22 名と、JNS10 名、計 32 名が調査の対象である。SLJL はスリランカで高校生の頃から日本語を学習し、高校卒業試験(A/L)ⁱⁱ試験で日本語の試験を受験し、その成績において上位群とされる学習者である。牧原(2016)の調査結果を考慮すると、日本語学習歴が短く日本語能力が低い学習者には動詞の自他選択以外の面でも誤用が多いと想定されるため、十分な日本語能力があると考えられる、大学で日本語を専門として学習する SLJL を対象に自他動詞の選択傾向について検討を行う。

7. 分析方法

本調査では、JNS と SLJL が謝罪を行ったメールのうち、「事情説明」部分のみを分析対象とする。Beukmann (2013)を参考に、自他動詞の使用が一番現れやすいところとして「事情説明」部分に限って、自他動詞の使用を分析した。事情説明部分をさらに

【1】対象物に直接影響を与える動作の説明(コーヒーをこぼした)と【2】その結果生じた事態(本を汚した)の説明として二つに分けて、自他動詞の使用について詳しく検討した。また、SLJL の回答を JNS の回答と比較し相違点を検討した。

表 1：謝罪を表すメールの構成(Beukmann (2013)を参考に筆者作成)ⁱⁱⁱ

構成	例
事情説明 己弁護、被害発生時の客観的な状況説明、自分の責任を明示的に承認 (1) 対象物に直接影響を与える動作の説明(コーヒーをこぼしたことについて) (2) その結果生じた事態の説明(本を汚したことについて)	以前先生からお借りした本についてですが、うっかりコーヒーをこぼしてしまい、本をよごしてしまいました。
謝罪、申し訳なさの表明 被害の大きさについて言及、慣用表現、または慣用表現、以外の表現で謝罪	貴重な本をお借りしていたにもかかわらず、本当に申し訳ございません

8. 調査結果

8.1. JNS と SLJL の自他使用状況

SLJL が相手に対して大きな被害を与えてしまったことを謝る場面(表1の「事情説明」)において、日本語の動詞の自他をどのように表出するかを JNS と比較しながら観察する。

以下の表2と表3は、彼らの書いた謝罪メールのうち、「事情説明」部分をまとめたものである。表中の「【1】」では、対象物に直接影響を与える動作(コーヒーをこぼした)、「【2】」ではその結果生じた事態(本を汚したこと)の説明における自他使用について分析する。さらに事情説明部分では【1】と【2】において、単文を使用するか複文を使用するかについては調査対象者によって異なるが、各調査対象者がどのように自他を使用しているかも表に示した。以下、【1】と【2】において JNS と SLJL が使用した動詞を太字で示す。

表 2：日本語母語話者による謝罪メールにおける「事情説明」の部分の抜粋^{iv}

母語話者	謝罪メールにおける「事情説明」の部分	動詞の使用	
		【1】	【2】
JNS1	お借りした 本にコーヒーをこぼして しまいました。大変申し訳ありません。	を+他動詞	✖
JNS2	先日、先生に貸していただいた本についてですが、 本を読みながら飲んで いた コーヒーを溢して しまいまして、 明後日までに返せない状況 です。申し訳ございません。	を+他動詞	明後日までに返せない状況です
JNS3	先生に借りていた 本にコーヒーをこぼして しまいました。本当に取り返しのつかないことをしてしまったと、自分の不注意を悔やんでいます。	を+他動詞	本当に取り返しのつかないことをしてしまった
JNS4	実は、本を読んでいるときに誤って コーヒーをこぼして しまい、お借りした 本を少しよごして しまいました。大変申し訳ありません。	を+他動詞、～を+他動詞	
JNS5	明後日○/○(○)にお返しするとお約束しておりましたが、 本に飲み物をこぼして しまい返却が難しい状態です。	を+他動詞	返却が難しい状態です
JNS6	先生からお借りしていた 本に不注意でコーヒーを溢して しまいました。誠に申し訳ございません。本は、コーヒーの染みがついていますが、なんとか読める状態ではあります。	を+他動詞	が+自動詞(～、コーヒーの染みがついています が、～)
JNS7	コーヒーを飲みながら読んでいたら、そのまま こぼして しまい、 汚して しまいました。せっかく貸していただいたのに本当にごめんなさい。	他動詞+他動詞	
JNS8	前からお借りしていた本についてですが、 私の不注意からコーヒーをこぼして汚して しまいました。大変申し訳ございません。	を+他動詞+他動詞	
JNS9	大変申し訳ないのですが、資料に 飲み物をこぼして しまい、 汚して しまいました。大切な資料を傷つけてしまい、本当に申し訳ございません。	を+他動詞+他動詞	
JNS10	不注意で先日お借りした 本を汚して しまいました。大変申し訳ございません。	✖	を+他動詞

表3：SLJLによる謝罪メールにおける「事情説明」の部分の抜粋

学習者	謝罪メールにおける「事情説明」の部分	動詞の使用	
		[1]	[2]
SL1	私のせいで飲みかけた コーヒーカップをこぼれてしまって本を汚して しまって本当にもうしわけございません。	を+自動詞～を+他動詞	
SL2	本当にもうしわけございませんが、先生に借りた本に飲んでいた途中で コーヒーを落ちて よごれてしまいました。どうしても読めない状態になってしまいました。	を+自動詞、自動詞	
SL3	先週、先生に借りた本が私のせいで飲んでいた コーヒーカップをこぼれて しまいました。本がとてもよ ぼれて しまって本当にもうしわけございません。	を+自動詞	が+自動詞
SL4	あさって返すことになった本は私のくせに よごれて しまいました。この本はもう使うことができないように よごれて あるから新しい本を買って返したいと思ったが本屋にもありませんでした。	私のくせに	は+自動詞。は+自動詞。 (二回言及)
SL5	～けれども、ほんとうは 本にコーヒーをこぼして しまい、 涙みとしわがついて しまいました。それでもうつかわないほどページの紙自体に着色にあります。	を+他動詞、が+自動詞	
SL6	先生、本当にもうしわけございませんが、うっかりしておかりした本の上に コーヒーがこぼれて よごれてしまいました。	が+自動詞	×□
SL7	先週の水曜日に先生からくださったN2のもじごいの本に コーヒーがこぼれて しましましてほんとうにごめんなさい。	が+自動詞	×□
SL8	～、先日借りた本につきましてですが、本当に申し訳ございません。実は、本の上にうっかりして コーヒーをこぼして しましましてよごれてしまいました。	を+他動詞、自動詞	
SL9	あなたから借りた本は私が飲んでいた コーヒーに思わずぶつかった ので甘やかされてしまいました。	コーヒーに思わずぶつかったので甘やかされてしまいました。	
SL10	明日に先生から借りた本を返さなければなりません、のんでいた コーヒーは私の間違で本の上におちました 。それで本は非常によごれたので、とにかく私はその本を返すことができません。	本の上に+自動詞	本は+自動詞
SL11	～でも私にこれをまもることができなくてほんとうにすみません先生。昨日私はべんきょうしているとき私の コーヒーカップをばいせんして しまいました。何にもすることができなくてしまいました。	私のコーヒーカップをばいせんしてしまいました。	×□
SL12	～でも、私のこともなげのせいで私はのんでいた ちやわんを本に転んで しまいました。その本は またつかえないほど よごれています。	～を+自動詞	本は～ほど自動詞。
SL13	私のゆだんするので コーヒーを本の上にたおれて しまったいへんよごれていました。	を+自動詞、自動詞	
SL14	本が返送されていないことをおしらせします。ほんとうに私はあなたに許しを請います。 その本を汚れている ので返品できません。	～本が返送されていないことをおしらせします。	を+自動詞
SL15	私はその本はお茶やをのみながらよんでいた。 コーヒーを本の上にたおれて しまいましたので たいへんよごれている 。	を+自動詞、自動詞	
SL16	私は先生からおかりした本はあさっておかえしするべきがまちがえ コーヒーカップがころがして よごれてしまいました。 これがかなりよごれました から本当にごめんください。	が+他動詞	が+自動詞
SL17	よくじつにひきわたそうとしている先生の本の上で私がのんでいた コーヒーをすすって しまいました。本は先生に けってとどけることができないほど よごれています。	を+動詞	本は～ほど+自動詞。
SL18	私が借りたあさってにわたさなければなら 本の上にコーヒーを落ちて ごめんあさい。	を+自動詞	×□
SL19	でもほんとうにその 本の上に私がいたでいたコーヒーをおちて本をよごれて もうしわけございません。	を+自動詞、を+自動詞	
SL20	先生、すみません。私は本を読んでいたうちに私の 手をぶかって コーヒーをこの本におちました。今この本を使うことができない。	を+自動詞、+を+自動詞。	今この本を使うことができない。
SL21	そのとき私のせいで お茶は本をとばして しまったいやらしくになりました。また使いにくいほどいやしくになりました。	お茶は本をとばしてしまっ	いやしくになりました
SL22	私の手でお茶が落ちて汚れて しまいました。	が+自動詞+自動詞	

牧原 2016 では、JNS の日本語の自他動詞の使用において、対象物に直接影響を与える動作と、その結果事態も「他動詞+他動詞」である方が好ましいと考えられる傾向が高いと述べている。本調査の結果においても、表 2 の結果を観察すると、JNS は【1】の「コーヒーをこぼした」という説明で「を+他動詞」を使用している。また【2】の生じた事態（本を汚した）の説明でも再び他動詞を使用し謝罪の意を示している。つまり、事情説明においては、自分の責任を認めていることが伝わるように他動詞を使用し、起こしたことを明確に説明する傾向があることが改めて確認された。さらに、コーヒーをこぼした結果生じた事態（本を汚した）の説明においては「明後日までに返せない状況です(JNS2)」、「返却が難しい状態です(JNS5)」、「本当に取り返しのつかないことをしてしまった(JNS3)」などを使用し、本を汚したことを遠回しに表現していることがわかる。つまり、ここでは相手のネガティブフェイスを尊重し、ネガティブフェイスを脅かすことを避けるための工夫として本を汚したことを間接的に伝える表現を使用したのであろう。さて、上記の JNS の回答傾向と比較しながら、SLJL による動詞の使用状況について述べていく。

SLJL は自他動詞を様々な方法で用いていることがわかる。つまり、日本語母語話者と異なる自他使用傾向が現れている。例えば、【1】の対象物に直接影響を与える動作の説明において SL05 と SL08 の 2 名の SLJL が「を+他動詞」を JNS と同様に正確に使用していたが、コーヒーをこぼすことによって生じた結果事態(本を汚した)を表現することにおいては「が+自動詞」を使用している。正しく助詞と動詞を使用していた SL05 と SL08 の回答を観察すると、JNS は複文において「他動詞、他動詞」の使用傾向があるのに対して、SLJL は「他動詞、自動詞」の使用傾向があると言えるだろう。また、SL05 と SL08 以外の SLJL が事情説明において「自動詞」を使用する傾向があることが確認できる。

また、表 3 を観察すると「コーヒーをこぼした」ことの説明と「本を汚した」ことの説明の 2 つの事情説明を行う際に 16 名の SLJL が「～てしまう」を正確に使用できていることがわかる (SL01,SL02, SL03, SL04, SL05, SL06, SL07, SL08,SL09, SL11, SL12, SL13,SL15, SL16, SL20, SL21)。また、SLJL は動詞の正しい活用形を使用することができているが、自他動詞を使用する箇所に多数の誤用があることがわかる。これは SLJL が初級、中級で学んだ、残念な気持ち、後悔の念を表す「～てしまう」をきちんと習得していても、動詞の自他の使い分けが習得しにくいため起こっていることであると考えられる。

8.2. SLJL による事情説明文における自他動詞使用上の問題点

JNS にはない SLJL 特有の困難点としては、助詞の使用に加えて自他動詞の使い分けと、正しい意味の動詞を使い分けことがあげられる。それらを以下で詳しく見ていく。

表 4：「コーヒーをこぼした」場面における助詞と自他動詞の使用状況のまとめ

対象者	は+自動詞	が+自動詞	を+他動詞	が+他動詞	を+自動詞	その他	コーヒーをこぼしたことに ついて表記しない。
JNS (N=10)	-	-	9 名 (JNS1~9)	-	-	-	1 名 (JNS10)
SLJL (N=22)	1 名 (SL10)	3 名 (SL06, SL07, SL22)	2 名 (SL05, SL08)	1 名 (SL16)	9 名 (SL01, SL02, SL03, S L12, SL13, SL15, SL1 8, SL19, SL20)	5 名 (SL09, SL11, SL14, SL17, SL21)	1 名 (SL4)

表 5：「本を汚した」場面における助詞と自他動詞の使用状況のまとめ

対象者	は+自動詞	自動詞のみ	が+自動詞	を+他動詞	を+他動詞、 他動詞	を+自動詞	が+他動詞	その他	本を汚したことに ついて記入しない
JNS (N=10)	-	-	1 名 (JNS6)	2 名 (JNS4, JNS10)	3 名 (JNS7, JNS8, JNS9)	-	-	3 名 (JNS2, JNS3, JNS5)	1 名 (JNS10)
SLJL (N=22)	5 名 (SL04, SL10, SL1 2, SL15, SL17)	5 名 (SL02, SL08, SL 13, SL15, SL22)	2 名 (SL03, SL05, SL 16)	1 名 (SL1)	-	2 名 (SL14, SL19)	-	3 名 (SL09, SL20, SL 21)	4 名 (SL06, SL07, SL11, SL 18)

また、多くの学習者は助詞と動詞のねじれが起こっており、謝罪を表す場面にもかかわらず、自動詞を使用していることが多い。それに加えて、表 4 で示した「コーヒーをこぼした」ことに対して自他を使用する際は「を+自動詞」を多くの SLJL が使用している一方、表 5 で取り上げた「本を汚した」を表現する際に「を+自動詞」を使用しているのは 2 名のみである。そこで、SL19 は「本の上にコーヒーをおちて本をよごれてもうしわけございません。」と 2 つの説明とも「を+自動詞」を用いている。その要因としては以下の 3 点が予測できる。

まず、意図的にしたようにとらえられることを回避する際に起きた誤用であると考えられる。「コーヒー+を+飲む」などの文型パターンに慣れている学習者が【1】の「コーヒーをこぼす」においても意図的にしたようにとらえられてしまうことを回避するために自動詞を使用してしまった可能性が考えられる。さらに【2】生じた結果事態も意図的ではないということを示すために、SLJL が「本は汚れた(は+自動詞)、本汚れた(助詞抜きで自動詞)」のように表現することが多い可能性がある。

次の要因として、対になっている自他動詞に対する形式的な混乱により起きた誤用であると考えられる。SLJLが「こぼれる」「汚れる」などの動詞を自動詞として使用するつもりだったのか、他動詞として使用するつもりだったのかという彼らの意図は必ずしも明確ではない。

さらに3つ目の要因としては、助詞と動詞の自他の組み合わせの混同が挙げられる。SLJLの多くは助詞「が、を、は、に」を使用していて、助詞と動詞の自他との組み合わせを混同していることが考えられる。他にも、SL19で見られたような混乱を回避するためなのか、SL10は「コーヒーは私の間違で本の上におちました。それで本は～よごれたので、～」のように2つの説明とも「は+自動詞」を用いて、助詞と動詞の使い分けの問題を避けようとしていると考えられる。

8.2.1. 動詞の使用

さらにSL09、SL11、SL17も「甘やかされてしまいました」「ばいせんしてしまいました」「コーヒーをすすってしまいました」などの言い方で事情説明において対応する自他動詞が存在する動詞の使用を回避することを目的として、別の言葉を使用し事情を説明しようとしたと考えられる。一方、「本を汚した・シミを付けた」という結果事態を表現する際には、15名のSLJLが、「汚れる・汚す」を使用した。それ以外のSLJLは、「染みがつく(1名)」「自他以外の表現(6名)」といった動詞を使用した。「汚れる・汚す」と意味が似ている動詞がないため、彼らにとって「汚れる・汚す」は習得しやすかったと考えられる。

他にも、表3を見ると多くのSLJLが「コーヒーをこぼした」ことを説明する場面において「落ちる、転ぶ、倒れる、こぼれる」などの動詞の使い分けにも困難であった可能性もあると考えられる。具体的に、「コーヒーをこぼす」という動詞が正しい場合では、SLJL22名内6名が「こぼれる・こぼす」を使用し、残りのSLJLはそれ以外の動詞や表現を使用した。たとえば、「落ちる・落とす(6名)」、「倒れる・倒す(2名)」、「転ぶ、転がす(2名)」などである。これらの中から適切な動詞を選択し、同時に自動詞・他動詞を使い分けるのは非常に難しく誤用を引き起こしやすいことが分かる。

以上のSLJLの回答を観察すると、彼らにとって日本語の自他動詞の使用が多様な要因の影響し、誤用を起こしやすいことが明らかである。

8.2.2. 母語の影響

上述の結果において、SLJLの間では「を+自動詞」の使用者数が半分近くいたため、助詞と自他動詞の組み合わせについての混乱を招きやすい理由として、シンハラ語の文構成による影響がある可能性が想定される。そこで、以下のように論述する。

シンハラ語では自他に関わらず動詞の前に対格または対格主語が使用される。そのため、SLJLが日本語文の中に対格があるとき、自他にかかわらず「を」を使用する傾向がある。その結果、「こぼれた」の「自動詞」にも助詞として「を」を組み合わせたSLJLが多かったと考えられる。

例：

- ① මම කෝපි හැලුවා.
Mamə kōpi hæluvā.
私は(無表示) コーヒーを(無表示) こぼした
(主格^v) (対格) (他動詞・意志動詞・過去) : 何か強い意志があつてコーヒーをこぼした場合

に使える)

- ② කෝපි හැලුණා.
kōpi hælunā
コーヒーを(無表示) こぼれた
(対格主語) (非意志動詞・自動詞・過去)

上述の例を考慮すると、自動詞「こぼれた、倒れた等」を選択した背景には、日本語とシンハラ語の動詞の選択意識の影響があつたと考えられる。日本語において、JNSは動作や状況をコントロール可能な状態で、話者にとって好ましくない事象が生じた場合、他動詞を用いて動作のコントロール性をより大きく表現した方がポライトネスが高くなると牧原(2016)では述べられている。一方シンハラ語の動詞の自他を選択する際には、話者は意図的にその行為をしなかった場合は動詞の自動形を選択する。例えば「私はコーヒーをこぼした」という場合はシンハラ語では自動詞を使用する。逆にシンハラ語では、このような場面で他動形を使うと故意にその行為をしたというニュアンスが加わる。そのため、SLJLがJNSと異なるニュアンスで謝罪の場面で他動詞ではなく「自動詞」を使用しているのは、母語での自他使用意識の影響である可能性が考えられる。以上を踏まえると、事情説明においては助詞と動詞の組み合わせでは「を+自動詞」を使用するSLJLが多かった理由として母語の影響が考えられる。

9. まとめと考察

本調査では、同じ場面設定でJNSとSLJLにおける自他使用の特徴を明らかにした。その結果を踏まえ、SLJLは謝罪メールの事情説明をする際に動詞の自他選択において数多くの誤用があることが示された。

まず、牧原(2016)の結果と同様に JNS は「状況説明」において、他動詞文を用いる傾向がある一方、SLJL の場合は JNS の結果と異なる傾向が見られた。SLJL の回答傾向を観察する限りでは、SLJL が上級に進めばそれに伴って謝罪の場面での自他使用が習得可能になるかについては、疑問が残るところである。そのため、特に謝罪のような責任を明確に示すべきである場面での自他動詞の使用については、今後、指導する上で注意が必要であると考ええる。

最後に、本調査で明らかになった結果を改めて整理すると、SLJL における自他使用の問題点は以下のようにまとめられる。

i. 日本語の自他動詞の特徴による問題

* 動詞の自他の使い分け

* 助詞の使用

ii. 使用場面において動詞の自他使用の問題

JNS の持つ動詞の自他の持つニュアンスについてわからず、JNS の使用と異なる

自他動詞を選択することで、失礼な印象を与えてしまうこと。

iii. 母語であるシンハラ語の影響による問題

* 母語の文構成の影響

* 自他使用意識に対する母語の影響

iv. 使用場面に応じて文脈に合う正しい動詞の使い分けの困難

以上を踏まえ、SLJL に対して日本語の自他を指導する際に、自他動詞を語彙として暗記しながら勉強するのみではなく、母語と比較しながら母語の干渉を理解した上で指導すること、JNS の回答傾向を意識させること、使用場面を例に練習することなどが重要である。なお、今後日本語を指導する際に、上述の点に注目すべきであると言えるだろう。

一方、本研究では、残された課題もある。調査協力者の日本語能力についてより厳密に調べる必要があること、SLJL の自他使用を他の母語話者と比較を行う必要があること、学習者が自他使用する際の自らの自他使用意識について探る必要があること、などが挙げられる。これらは今後の課題とし、詳しい分析は別稿に譲りたい。

ⁱ筆者の母語はシンハラ語であり、シンハラ語を母語とする SLJL 学習者の観点から本調査を行う。

ⁱⁱA/L 試験「General Certificate of Education Advanced Level Exam (G.C.E.A/L Examination)」・A レベル試験は教育省が行われる試験で全国の学校で同じ問題が出題される。

ⁱⁱⁱ以下の表の編みかけのところが本調査で対象とした部分である。

^{iv}JNS と、SLJL の番号は筆者が付けたものである。

^vシンハラ語の格変化は名詞語尾に「格ニパータ」を付けて表されるものである。格ニパータは日本語の格助詞に対応する。「私が/主格-私の/属格-私を/対格-私に/与格」の格変化は「mamə (無表示)-magē -māwə -matə」で表される。太字にした部分が日本語の助詞とシンハラ語のニパータである。シンハラ語では主格の「私が」に当たるニパータ(助詞)がない(無表示である)以外、属格・対格・与格を表すニパータという接尾辞がある。(Chandralal(2010)、宮岸(2014)、ラトナーヤカ(2012)、Nayana・Samantha・Ikeda(2003)を参照。)

謝辞

本論文の取りまとめに際して、貴重なご意見とご校閲をいただいた大阪大学・日本語・日本文化センターの大和祐子先生に深く感謝いたします。また、本稿を作成するにあたり調査のデータ収集にご協力いただきました、P.D.MALSHA MUTHUMALI 先生をはじめスリランカの日本語学習者の皆様に厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 田中優子(2006)「日本語学習者のお詫びの手紙—母語話者による評価—」『日本語論議』7,pp.12-24
- 中石ゆうこ(2020)『日本語の対のある自動詞・他動詞に関する第二言語習得研究』日中言語文化出版社
- 西村史子(1998)「中級日本語学習者が書く詫びの手紙における誤用分析—文の適切性の観点から—」『日本語教育』99, pp.72-83
- ボイクマン総子、宇佐美洋(2005)「友達の間での謝罪時にもちいられる語用論的方策—日本語母語話者と中国語母語話者の比較」『語用論研究』7,pp.31-44
- ボイクマン総子(2013)「謝罪場面における日本語初級学習者の語用論的な発達」『2013 CAJLE Annual Conference Proceedings』, pp.20-29
- Nayana Elikewala・Samantha Thelijjagoda・Ikeda Takashi(2003)「日本語-シンハラ語における格助詞相当語の対応について」『言語処理学会第9回年次大会発表論文集』,pp.473-476
- 牧原功(2012)「日本語の配慮表現にかかわる文法カテゴリー」『群馬大学国際教育・研究センター論集』11,pp.1-14
- 牧原功(2014)「配慮表現と動作のコントロール性」『日本語コミュニケーション研究論集』3,pp.63-72
- 牧原功(2016)「事態の把握と表出—自他動詞の選択との関わりから—」『言語の主観性—認知とポライトネス接点』くろしお出版,pp.151-171

宮岸哲也(2014)「シンハラ語二項動詞文の非主語項における与格/対格の交替について」
『安田女子大学紀要』42,pp35-45

守屋三千代(1994)「日本語の自動詞・他動詞の選択条件—習得状況の分析を参考に」
『講座日本語教育』29,pp.151-165

Chandralal, D. (2010). *Sinhala*. John Benjamins Publishing Company

[参考URL]

かしやぐら通信編著『シンハラ語の文法の基礎』

<https://www.ne.jp/asahi/khasyaareport/khasya/nettaigo/sinhala-grammar/grammar-f.htm>

2020年10月10日参照

独立行政法人国際交流基金(2020)『海外の日本語教育の現状：2018年度日本語教育機関
調査より』pp.32-38,

<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey2018/all.pdf> 2020年11月20

日参照

宮岸哲也(2015)『日本語とシンハラ語における動詞構文とその各標識の対照研究』[学
位論文, 大阪府立大学大学院]. 大阪府立大学学術情報リポジトリ.

<http://hdl.handle.net/10466/14471> 2020年4月9日参照

ラトナーヤカディルルクシ(2012)『非意志性の分析:シンハラ語をはじめアジア語の状況を
巡って』[博士学位論文,名古屋大学]. 名古屋大学学術期間リポジトリ.

<https://nagoya.repo.nii.ac.jp/records/15938> 2020年4月9日参照